

カビール 『ビージャク』 和訳余滴

— 智慧の 3 4 —

橋本 泰元

1. はじめに

本稿は、既刊の拙訳『宗教詩ビージャク—インド中世民衆思想の精髓』(平凡社「東洋文庫」703, 2002年)において、いくつかの理由によって省略した部分、すなわち第2番目の「サバド」(「正師のことば」)の後半に置かれており、ウツタル・ブラデーシュ州東部ないしビハール州西部地帯の民謡形式で著わされているとされている詩篇8箇のうち、最初の部分を翻訳したものである。

今回は、紙幅の関係で最初の部分のみ訳出したが、いずれ別稿にて他の詩篇も訳出し、『ビージャク』(カビール・チャウラー寺版)の完訳を目指す予定である。

原題『ギヤーン・チャウンティーサー』(gyāna cauṁtisā)の字義は、デーヴァナーガリー文字の子音字34文字の配列に従って説かれた智慧、という意味である。今回は面倒を避けるために原文のローマ字表記は掲げないが、各2行詩における各行の冒頭部分の音は子音字母の音で始まっている。この形式にはタントラにおける字輪観などの残滓も考え得るが、その考察は次期に譲り、ここでは、民衆への識字教育の副次的効用を指摘しておくに留めたい。また、「ラマイニー」、「サバド」の前半部分そして「サーキー」の各詩篇の配列には、内容的類似性のほかに、句の冒頭における音の類似性がある程度考慮されていることも付言しておきたい。なお、底本、略記号などは、上記訳本を参照して頂きたい。また各2行

詩の冒頭の番号は訳者が便宜上付けたものであり、*印は、訳者注を表す。

2. サバド 第2部「智慧の34」和訳

聖音オームの根源を知る者は、〔世界を〕書いては消すその者を認める。

オームと人みな言うが、それを見極めた者は稀なり。

- 1 カ (ka) の字 蓮華を光のなかに見つければ、月は満ち小箱に収まらず。

そこで赤黄色を得れば、不可思議なるものを捉え虚空に住す。*

* BTM によれば、*Chāndogya-upaniṣad* 8.1.1 hariḥ aum. atha idam asmin brahma-pure daharaṃ puṇḍarikaṃ veśma, daharo'sminn antarākāśaḥ tasmin yad antaḥ tad anveṣṭavyam tad vā va vijijñāsitavyam 「ハリヒ アーム さてこのブラフマンの街に小さな蓮華の住処があり、その中に虚空がある。その中に存するものが追い求められるべきであり、それが理解されるべきである」(訳者訳)に对比できる。

- 2 カハ (kha) の字 〔それを〕望むならば〔己の〕誤りを正せ、
〔でなければ〕^{あるし}主を捨てて地獄に行く。
敵を放して赦してやれ、〔そうすれば〕憂いはなく不壊の地位を得る。

- 3 ガ (ga) の字 導師のことは思惟し、他人の言葉に耳を貸すな。
鳥類が決して行けない所に、不可思議なるものを捉え虚空に住す。

- 4 ガハ (gha) の字 肉体は壊れ肉体は生じるから、
肉体の中に肉体を取めておけ。

肉体が胚芽し肉体が再び生じたら、肉体の中に再び肉体は収まる。

- 5 ンガ (ña) の字 見つめて昼夜過ぎ去り、見つめて眼は赤くなる。
見つめている一瞬に、その瞬間に眼を閉じる。

- 6 チャ (ca) の字 とても大きな絵ができた、
絵を捨てて気付け、絵師よ。
これはなんと奇妙な絵になったものだ、
絵を諦めて目覚めよ、絵師よ。

- 7 皇帝が側に来た、すべての望みを消してなぜ満足しているのか。
私はおまえに事ある毎に言い聞かせている、
主を捨ててなぜ己を縛るのか。

- 8 ジャ (ja) の字 この身体を生きながら燃やすな、
若さを燃やし作法に従って身体を修練せよ。
少し作法を知って身体を燃やせば、この肉体が光に輝く。

- 9 ジャハ (jha) の字 絡まっては解れて〔おまえは〕どこへ行く、
探しながら絡まって命息は失せる。
何千万もの高山を探し戻って来ても、砦を築いた者が砦を得る。

- 10 ニャ (ña) の字 統御を好み、分別をもって疑念を捨てよ。
見るな、逃げるな、これが最も賢い。
見えない所に自ら走り、何もない所に心を集中させよ。
何もない所に全てを知り、何かある所では分別せよ。

- 11 た (ta) の字 困難な道が心の中にあるが、
扉を開けて宮殿に行け。
その中で動揺を抑えれば、不動となって何処に行くこともない。

(46)

- 12 たは (ṭha) の字 帰趨は遠いが詐欺師は近く、
常に無情にも心を取り囲んでいる。
賢き人々を騙した詐欺師、その詐欺師を見分けて帰趨を見極めよ。
- 13 だ (ḍa) の字 [心に] 恐れが生じて恐れがあるから、
恐れの中に恐れを収めておけ。
恐れが恐れて恐れが再び生じたら、恐れの中に再び恐れは収まる。
- 14 だは (ḍha) の字 探し求めて何処に行く、
探し探して命息が失せる。
何千万もの高山を探し探して戻って来ても、
探していたものは何処でも得られない。
- 15 な (ṇa) の字 [人は] 二つの村をつくり、
砂中におまえの名前を探した。
ある者は富を残して死んだ、死んだ者をどうして数えられようか。
- 16 タ (ta) の字 三つの構成要素 (グナ) を過ぎるものはなし、
身体を三界に潜ませておけ。
身体を三界に潜ませておく者は、真実の中の真実を獲得する。
- 17 タハ (tha) の字 とても深くて底を探れず、
これは不動で、あれは不動ではない。
少しずつ不動になせ、兄弟よ、
柱がなくても寺 [の屋根] が建つように。
- 18 ダ (ḍa) の字 見よ、[すべては] 壊れるものだ、
見たままに考えよ。
十の門に鍵をかければ、慈悲深き者を礼拝できる。*

* 「十の門」を BTM, BPP とも十種の器官と解釈している。

- 19 ダハ (dha) の字 下方に闇がある、
下方を離れて上方に心を向けよ。
下方を離れて上方に心をもたらせ、我執を消して愛情を増せ。
- 20 ナ (na) の字 その者は第四〔の状態〕に赴く、
〔他の者は〕神の驢馬となって草を食む。
我執を捨てよ、地獄に落ちるぞ、いま愚かな心よ、朝に目覚めよ。*
- * BTM によれば、「第四」は、ヴェーダーンタ学の説くアートマンの究極の状態で、覚醒・夢眠・熟睡の三状態を超越した状態のことである。前田専学『ヴェーダーンタの哲学』（平楽寺書店、1980年）188～192ページ参照。
- 21 パ (pa) の字 人みな罪をなし、罪をなして正義なし。
パの字は言う、聞け兄弟よ、われから得るものは何もなし。*
- * 二行目の「パの字」は、「罪」の原語 pāpa の頭文字で、それを象徴しているものと思われる。
- 22 パハ (pha) の字 果実がとても遠くになっている、
正師は試食しても、取ってはくれぬ。
パハの字は言う、聞け兄弟よ、天国と地獄のことは誰も知らない。
- 23 バ (ba) の字 人みな無駄口叩いて、無駄口叩いて仕事にならず。
〔学僧は〕意味を説いて語るが、
〔人は涅槃の〕果実の本質を知らない、兄弟よ。
- 24 バハ (bha) の字 恐れと誤りに満ち満ちている、
恐れと誤りによって、近きものは遠い。
バハの字は言う、聞け兄弟よ、恐れと誤りが生じては失せる。

(48)

- 25 マ (ma) の字を享受し〔人は〕本質を得ず、
我執によって自己の根本を失う。*
マーヤー (幻影) への愛着が世界中に満ちている、
マーヤーの幻惑を見極め考えよ。
- * BPP は、「マの字」を「マーヤー」の意味に取っているので、それに従う。
- 26 ヤ (ya) の字 世間は〔マーヤーに〕満ちている、
世間から遠くに離れよ。
ヤの字は言う、聞け兄弟よ、
我執によって世間は勝利の喜びを得る。
- 27 ラ (ra) の字 争いがもつれた、
ラーマと言えば苦痛がなくなると。
ラの子は言う、聞け兄弟よ、正師に尋ねてから礼拝供養せよ。
- 28 ラ (la) の字 舌足らずの発音で人に教えを説く、
舌足らず〔の弟子〕がやって来て、舌足らず〔の導師〕が悟りを説く。
自ら舌足らずが他人に教えを説いて、ひとつの畑を二人で耕す。
- 29 ヴァ (va) の字 あれ、あれと人みな言う、
あれ、あれと言っていても仕事にならず。
あれと言って聞く者は誰でも、天界と地界を見分けられない。
- 30 シャ (śa) の字 水を誰も見ず、水と冷たさが同じ〔と見誤る〕。
シャの字は言う、聞け兄弟よ、虚空の如く世界は潰え去る。
- 31 シャ (ṣa) の字 本もの本ものと人みな言う、
本ものほんものと言っても仕事にならず。

しゃの字は言う、聞け兄弟よ、ラームの名号の念誦に専念せよ。

- 32 サ (sa) の字 火葬の薪に強引に焼かれ、
 矢に射貫かれ人みな苦熱に焼かれる。
 サの字の家には空虚しかない、これほどのことも誰も知らない。*

* 「サの字の家」を、BPP は「無知と蒙昧」と解釈している。

- 33 嗚呼 (hāya) 嗚呼とって人みな逝くが、
 喜びと哀しみは皆のなかに収まる。
 嗚呼、嗚呼とって偉大な人みな逝ったが、
 哀しみの急所を誰も得られなかった。

- 34 クシャ (kṣa) の字 瞬間の帰滅にすべてが消え去る、
 臨終におよび誰が教えてくれるか。
 臨終に誰も究極を得られなかった、
 カビールはあらかじめ声高く言う。

〈キーワード〉 中世インド、カビール、ピージャク、和訳、中世思想